



小学校での英語重視の記事を
読むたびに、わたしは岡本太郎
を思い浮かべる。太郎の絵は、
とうとう好きになれなかった。
昨春秋（2016年9月26日）

「平田昌子姉さんが亡くならし
たのですよ」と松浦の旅館鶴屋
の女将から電話があった。鶴屋

の女将の松浦弁は完璧な松浦っ
子の言葉である。

鶴屋とは遠い親戚である。昌
子姉さんは星鹿の祖母の家に預
けられていた時期があった。昔、
子だくさんの家は親戚に子供を
預けたものである。わたしが生
まれた日、わたしの顔をのぞい

治よりも昔であるらしい。看板
も古く、威厳すらあった。由緒
しい。

ある旧家である。昌子姉さんも
和子姉さんもこの家で生まれて
いる。昌子姉さんは家へのこだ
りである。この「韋駄天の記」
わりがある人であったのではな
いか。星鹿の祖母キヨは、平田
醤油屋のおばあさんとは姉妹で

70過ぎて子供扱い

である。いかにも昌子姉さんら
いざとなると松浦は遠い。我
が家の仏壇でご冥福を祈るばか
りである。この「韋駄天の記」
もよく読んでくれていて「耕大
ちゃん、あんた文章の上手にな
ったねえ」と褒めてくれた。70

も過ぎた物書きに文章が上手い
ものないもんだが、いつまでも子
供扱いであった。読書家であつ
た。電話をすると「和子には電
話したとね」が口癖であった。
してるに決まっている。「賑

た昌子姉さんは「こぎゃん子は
いらん」と言ったそうである。
わたしは生まれたての猿みたい
な顔をしていたそうだ。「恥と
書いて恥と読む 恥かきっ子恥
をかきかき 恥を書く」遊園。

ある。醤油屋のおばあさんは美
形の人であった。「おばばしゃ
ま」である。どっちが姉だか妹
だかは忘れた。2人とも口は悪
かった。昌子姉さんは憧れの和
子姉さんの姉である。「もう、

も過ぎた物書きに文章が上手い
ものないもんだが、いつまでも子
供扱いであった。読書家であつ
た。電話をすると「和子には電
話したとね」が口癖であった。
してるに決まっている。「賑

あの世は賑わっているのかもし
れない。よく笑う人だった。わ
たしは、もっとあなたに褒めら
れたかった。
わたしが松浦を離れた昭和39
年は「東京オリンピック」の年
であった。円谷幸吉とヒートリ
ーのデッドヒート、エチオピア
のアベベの2連勝。体操はチェ
コのチャスラフスカ、柔道は無
差別級優勝のアントン・ヘーシ
ンクが話題になった。そして「東
京オリンピック」はこの日に始ま
ってこの日に終わる」とまでい
われた鬼の大松博文監督率いる
日本女子バレーボールが宿敵ソ
連を下し、初の栄冠に輝いた。
テレビの視聴率は85%に達した
といわれている。「東洋の魔女」
である。

昔、松浦市志佐町には「平田
醤油屋」があった。創業は明

84歳までも生きたとけん、手術
はせんでよか」ともいったそう

の書を贈呈したら、額に入れて
玄関に飾ってくれていた。いま、

（松浦市出身）